

紛争はいかに語り継がれるのか

映画『ベアトリスの戦争』に描かれた女たちの経験

亀山 恵理子

はじめに

東ティモール初の長編ドラマ映画『ベアトリスの戦争』(2013年)は、インドネシア時代の東ティモールを描いた作品である。インドネシアが侵略した1975年から、独立の是非を問う住民投票後までの時代を、ベアトリスという東ティモール女性がいかに生きたのかを主軸として物語が展開される。24年間にわたり東ティモールを実効支配した隣国インドネシアでは、近年若い世代の映画監督らが、自らの社会の「過去」に向き合う作品を生み出している¹⁾。東ティモール映画『ベアトリスの戦争』もそれらのインドネシア映画と同様に、「過去」に向き合う性格をもつ作品であるといえる。

本稿では、『ベアトリスの戦争』においてインドネシア時代を生きぬく女たちの経験がどのように描かれているかをみていきたい。以下では、作品の背景となる東ティモールの歴史、作品概要と制作について説明したうえで、作品に描かれた女たちの経験を社会的背景とともに述べる。また最後に、映画『ベアトリスの戦争』が作られ、上映されることの意義を考える。

1. 作品の背景——東ティモールの歴史

オーストラリアの北に位置する東ティモールは、日本の長野県ほどの国土に約126万人が暮らす小さな

国である。大部分の人が農業を生業としており、米やトウモロコシ、イモ類、コーヒーが主な収穫物である。オーストラリアとの国境に位置する海域には石油、天然ガスがあり、国家予算に占める天然資源収入の割合は8割を占めている。住民の98パーセントはカトリックを信仰しており、日曜日には教会の礼拝に向かうなどカトリックの慣習がみられる。一方暮らしの中には、東ティモール最高峰のラメラウ山には亡くなった人の霊が集まると考えられているように、精霊信仰が息づいている。

16世紀以降長年ポルトガルの植民地支配下におかれていた東ティモールでは、第二次世界大戦中には日本軍による占領を経験し、日本の敗戦後はポルトガルによる支配が復活した。1974年に宗主国ポルトガルで植民地支配の維持を主張していた政権が交代し、それに伴い東ティモール独立の動きがみられるようになった。東ティモールでは3つの政党がつけられたが、そのうちフレティリン(東ティモール独立革命戦線)はポルトガルからの即時独立を唱えた。政党間での対立が深まる中、フレティリンが1975年11月29日に独立宣言を行うものの、12月7日には隣国インドネシアが全面侵攻した。

インドネシア軍による侵攻から最初の3年間は、東ティモールは戦争状態となった。インドネシア軍はフレティリンと激しい戦闘を繰り返したのち、内陸部への掃討作戦をはじめた。この時フレティリンだけではなく多くの住民が危険から逃れるために山へと向かった。1970年代後半にはそれらの人々の多くが投降し、「集住キャンプ」に住まわされた。移動の自由がない集住キャンプを中心に飢餓が広がり、インドネシアの侵攻から数年間に人口約60万のうち10万人以上が命を失ったと言われている。

フレティリンの準軍組織であるファリンティル(東ティモール民族解放軍)とインドネシア軍は戦闘状態にあったが、1983年には停戦合意が結ばれた。ファリ

1) たとえば、今日に至るまで真相が明らかにされていない9・30事件に関する長編ドラマ映画『聖なる踊り子』(イファ・イスファンシャ監督、2011年)はそのひとつである。同作品は、1982年に出版された『パルック村の踊り子』(アフマド・トハリ著)という文学作品を映画化したものである。ほかにも、スハルト政権時代に詩人であると同時に民主活動家でもあったウジ・トゥクルの当局からの逃亡生活を描いた『ソロの孤独』(ヨセフ・アング・ヌン監督、2016年)などがある。『メモリア』(カミラアンディニ監督、2016年)は、インドネシア時代に性的暴力を受けた東ティモール人女性の物語である。インドネシアの女性監督による同作品は、2016年の釜山国際映画祭で優秀賞を受賞したほか、同年のインドネシア映画祭で最優秀短編映画にノミネートされた。

ンティルはその後山でインドネシア軍と対峙し、住民が食糧や薬の調達、情報伝達によってファリンティルを支えるようになった。1988年にはフレティリンを含むすべての抵抗運動が統合され、のちに「東ティモール民族抵抗評議会」となる統合組織の議長にファリンティル司令官だったシャナナ・グスマンが就任した。抵抗運動が組織化され、住民の地下活動が運動を支える中、インドネシア軍による住民への抑圧も強まっていった。

インドネシア政府は東ティモールへの渡航を制限していたため、東ティモールで何が起きているのかを知るのは困難な時代が続いた。1991年に平和的なデモに対して国軍が無差別発砲し、多くの若者が犠牲になるサンタクルス事件が起こった。この事件を契機に東ティモール問題に国際社会の関心が向けられるようになった。その後インドネシアの政情が大きく変化する中、1999年には国連主導による独立の是非を問う住民投票が実施された。インドネシア軍に支持された東ティモールの民兵組織による暴力が激しさを増す中、有権者の78.5パーセントが独立支持という意志を表明した。その後国連による暫定統治を経て、2002年5月に東ティモールは主権を回復し、正式に独立国家となった。

2. 作品の概要——物語と製作、上映

2-1 歴史を織り込んだ物語

映画『ベアトリスの戦争』は、1975年から1999年頃までの東ティモール、つまりインドネシアによる侵略と実質的な占領を経験した時代の東ティモールを舞台とした作品である。インドネシア支配下の東ティモールで、侵略と占領が女たちにどのような影響をもたらしたか、また女たちはいかに生き抜いたのかが描かれている。物語は次のとおりである。

主人公のベアトリスがまだ子どもだった頃、インドネシアが東ティモールに侵攻した。それからほどなくして、ベアトリスは母親の取り計らいによりトーマスという少年と結婚する。双方の家族が結婚の儀式を行い、一緒に暮らし始めた二人の間には男の子が生まれる。ある日、停戦合意にファリンティルが抵触したという理由で、インドネシア国軍による村の住民への攻撃が始まる。ベアトリスら住民は攻撃から逃げまどい、

村の男たちは近くの川辺に連れていかれ、そこでインドネシア国軍によって射殺される。トーマスは虐殺を逃れたものの、その後は行方知れずになる。

夫を失ったベアトリスと同様、義姉のエリザもトーマスを思いながらその後の日々を過ごす。エリザはインドネシアの軍人と家庭を築き、一女をもうける。長い間帰ってこない弟はすでに死んだものと、エリザは自らに言い聞かせる。一方ベアトリスは、夫は生きていると信じて日々を生きていく。長い年月が経ち、独立の是非を問う住民投票後にトーマスと名乗る男性が帰郷する。ベアトリスは、一旦はその男性を夫として受け入れるが、後に別人であると確信する。男性はインドネシア国軍が組織した統合派の東ティモール人民兵だったことが明らかになる。作品は、その男性との間に生まれた女の子を抱くベアトリスとエリザのシルエットで終わる。

この作品の物語には歴史にもとづく内容が織り込まれている。東ティモールの首都デシリから東へ300キロメートル離れたところに位置するビケケ県では、1983年に「クララスの虐殺」と呼ばれる事件が起こった。インドネシア国軍内の東ティモール人兵士が逃亡し、その後ファリンティルと脱走兵士は国軍の第四工兵大隊を攻撃した。無差別報復に対する恐れと緊張が高まるなか、クララスの住民が国軍によって攻撃され、子どもから老人まで少なくとも55人が殺されたほか、川辺に連れていかれた男たち141人がその場で射殺された。2006年に公表された受容真実和解委員会(CAVR)の報告書には、このクララスの虐殺が記録されており、同報告書は作品の「隠れた脚本」となっている[CAVR 2013]。

ビケケ県での撮影においては、クララス出身の住民がエキストラで出演している。作品では住民らが撮影チームに語ったことが、実際の場面に取り入れられている。例えば、男たちに東ティモールの歌である「ラメラウ山」を歌わせてから国軍が虐殺を実行したことである。後述する共同監督の一人であるベティ・レイス氏によると、撮影に協力した住民の中には夫など家族を殺された女性たちもいたが、彼女らは作品中で演じることを望んだという。ベティ氏は、虐殺シーンの撮影は関係者の気分を沈ませ、苦痛をもたらす経験だったが、当時を生き抜いた女性たちの表情は凛々しかったとも述べている[ベティ・レイス]。

2-3 製作過程と上映状況

作品の監督は、オーストラリアのルイギ・アキスト氏と東ティモールのベティ・レイス氏である。ルイギ氏は、冷戦後のヨーロッパにおける移民問題や東南アジア大陸部からオーストラリアへの人身売買など社会問題に関する作品を作ってきた映像作家である。東ティモールの取材は1999年の住民投票後から始め、『ベアトリスの戦争』を手がける前にドキュメンタリー作品2本を制作している。また、その過程において撮影する側と撮影される側の関係について考えるようになり、2010年にはベティ氏らとともに「ディリ・フィルム・ワークス」という東ティモールで最初の映像制作団体を立ち上げた。この団体が行った映像制作ワークショップの東ティモール人参加者らが、『ベアトリスの戦争』の撮影にスタッフとして参加した。

一方、もう一人の共同監督であるベティ氏は、住民投票後の東ティモールで人々が楽しめるものをとの思いから、「ビビ・ブラック」(東ティモールの言葉で「お馬鹿な山羊」)という劇団で俳優、作家、舞台監督として活動していた。ベティ氏は、1975年の東ティモールを舞台としたオーストラリア映画『バリボ』(2009年)の撮影にキャスティング担当として参加した。その際に、後に『ベアトリスの戦争』で共同監督をつとめることになるルイギ氏と出会った。『ベアトリスの戦争』の製作後には、インドネシア時代に東ティモールからインドネシアへ連れていかれた子どもの帰還過程を追ったドキュメンタリー作品『アブドゥルとジョゼ』(2017年)をルイギ氏らとともに制作している。

作品プロデューサーはルイギ氏を含むオーストラリアの映像製作者2名が務め、撮影そのものはオーストラリアと東ティモールの混成チームで行われた。監督のみならず、現場の制作担当、撮影、照明、音響、衣装、メイク、美術といった役割をオーストラリアと東ティモールのスタッフがそれぞれ共同で担った。撮影と照明に関してはオーストラリアの技術スタッフが主となり、東ティモールのスタッフはアシスタントを務めた。撮影チームは総勢70人となり、うち60人以上が東ティモール人スタッフであった。つまり、『ベアトリスの戦争』は、多くの東ティモール人の参加によって作られた作品であるといえる。

作品は2013年に東ティモールでプレミア上映され、

その後劇場や野外での上映のほか、海外の映画祭で国内外の人々によって鑑賞された²⁾。東ティモールでは、2016年までに全13県で上映され、インドネシアとの国境に近いマリアナという町では1回の野外上映会に約4,000人が集まった。首都ディリでは、東ティモール唯一の映画館で5週間の上映が行われた。そのほかにも、作品の映像データはフラッシュメモリで人から人へと伝わり、スクリーン上でなくとも作品を鑑賞した人が多数いると思われる。作品を観た人の中には、「自分が小さい頃と同じだ」、「物語と同じ経験をした」という感想のほか、自分の経験を映画にしてほしいと監督に伝えてくる人もいたそうだ[亀山2019]。

3. 作品に描かれた女たちの経験

映画『ベアトリスの戦争』では、105分の物語の中にインドネシア時代の東ティモールにおいて女たちが経験したさまざまなことが物語られている。家族の殺害と行方不明、支配に対する抵抗運動への参加、自身が受ける性暴力、虐待、占領下の結婚、望まない妊娠など、作品で描かれるように東ティモールの女性たちは数々の苦難を経験した。ここでは、主人公のベアトリスと義姉エリザがいかにインドネシア時代を生き抜いたのかという観点から、2つの経験をとりあげたい。ひとつは時代を生き抜くための結婚であり、もうひとつは大切な人の喪失の受けとめ方である。

3-1 時代を生き抜くための「結婚」

ベアトリスがトーマスと結婚した時代は、東ティモールの政情が不安定な時期だった。非植民地化のプロセスにあった東ティモールには、当時フレティリンとUDT(ティモール民主同盟)という主要政党が生まれていた。UDTの指導者はポルトガル植民地時代の大地主所有者層であり、伝統的な首長らに接触していた。一方フレティリンは、大地主所有を批判し、村人に接触して識字教育を行っていた。このUDTとフレティリン、ポルトガル政庁の三者で暫定政府をつくる予定だったが、フレティリンがクーデターを計画しているとの情報をインドネシアの諜報員から得たUDT

2)『ベアトリスの戦争』はインドやオーストラリア、インドネシアで開催された国際映画祭で上映され、2013年の第44回インド国際映画祭では最優秀賞を受賞した。

は1975年8月に先制クーデターを実行した。フレティリンはUDTに対して肅清を行い、内戦状態となった。インドネシアはその後さらに不安定化を図り、12月には東ティモールに侵攻しフレティリンを攻撃した。

インドネシアによる侵攻からまだ間もない時期に、ベアトリスの母が娘をそれまで敵対する関係にあった家族の息子と結婚させたのは、「強い家族」の一部になることによって生きながらえるためだった。夫がすでに亡くなっているため婚資の交渉をひとりで行い、また儀式の当日に白いドレスに身を包んだベアトリスに結婚を伝えた母親は、その日複雑な表情を見せながらも娘を先方の家族に送り出した。東ティモールの織物で仕立てられた伝統的な衣装をまとったベアトリスの母親は、結婚の儀式で集まったトーマスの家族らとともに、「東ティモール万歳！東ティモール万歳！」と力強い声で叫んだ。「インドネシア」という共通の敵の前に二つの家族が結び付いた。

一方、ベアトリスの義姉となったエリザは、インドネシア侵略後の戦争状態をベアトリスらとともに生き抜き、その後インドネシアによる支配が強まっていく時代にインドネシア国軍の軍人と結婚した。すでに戦争状態ではなかったものの、国軍とファリンティルとの対峙は山中で続いており、また集落レベルにまで国軍の監視の目が向けられていた時代だった。エリザはある日インドネシア国軍のスミトロ大将に呼ばれ、性的関係の相手をするように言われたが、支配する側とされる側という関係性の中でエリザには拒むという選択肢がなかった。義妹のベアトリスは、エリザに対して、国軍の軍人と結婚することで集落の住民をまもり、また国軍の動きに関する情報が得られるかもしれない、だからスミトロ大将と家庭を築けばいいと言った。

エリザはスミトロ大将と夫婦としての生活を始め、一女をもうけた。望んだ結婚ではなかったが、娘を育て生活を共にする中で家族に対する慈しみの情が生まれたことを示唆するシーンもある。だが、スミトロ大将が東ティモールを去る時、奪うように娘をインドネシアへと連れて行ってしまい、エリザはたった一人の子どもを失うことになった。東ティモールではインドネシアの占領下で国軍から性暴力を受けた女性や、「現地妻」とされた女性が軍人との間の子どもを産んだ。だが今日の東ティモールにおいて、そのような経

験をもつ女性は「汚れた女」とみなされ、差別と偏見に囲まれている。また、そうした関係から生まれた子どもには時には役場で市民登録書が発行されないという差別的状況が生まれている [Faludiほか 2017]。

3-2 大切な人の喪失をどのように受けとめるか

作品中では、ベアトリスの夫であり、エリザの実弟であるトーマスが虐殺事件後に行方知れずになったという事実をそれぞれがどのように受けとめるかが描かれている。エリザは、長い間帰ってこない弟はすでに死んだものとみなすことによって、弟のいない日々を生きようとしていた。生活の中に精霊信仰が息づく東ティモールの慣習では、亡くなった人のために皿を裏返す。皿を裏返すのは、ここはもう本来あなたがいる場所ではない、食事はすでに亡くなっている先祖たちと一緒にとるのだと死者の魂に伝えるメッセージである。エリザはこの土着の慣習を実践することによって、トーマスはもう死んだのだと自らの気持ちを納得させようとした。

一方ベアトリスは、トーマスの皿を裏返そうとしなかった。川辺での虐殺以降、村の女たちは1年間喪に服した。東ティモールでは家族や親戚が亡くなると、1年間毎日黒い服を着て喪に服する慣習がある。作品では、黒い服を身につけた女たちが川辺に集まり、虐殺の死者への祈りをささげた後、それぞれが身につけていた黒い服を脱いだ。だがベアトリスは黒い服を着たまま、喪が明ける儀式を行う女たちから離れていった。トーマスは確かに1年間帰ってこなかったが、ベアトリスはまだどこかで生きているものと信じることによって、夫がいない日々を生きようとしていた。そのため、トーマスはもうこの世にいないとみなそうとする義姉の行為には、ベアトリスは沿うことができなかったのである。

大切な人の喪失をどのように受けとめるかは、東ティモールにおいては過去の問題ではない。インドネシアによる軍事支配が終わり20年経った現在においても、家族や友人がどうなったのかわからないまま今日にいたる人は決して少なくない。筆者は、2008年から2014年にかけて東ティモールでインドネシア時代の暴力と心的外傷に関する調査に従事していたとき、暴力の被害者からそれぞれの経験を聴くことがあった。自身がどのような経験をし、どのような感情を抱

き、また自身の経験をどのように捉えているのかを聴く過程で、「憎しみはない、当時は戦争だったから。けれども、生きているのか死んでいるのか、もし死んでいるのならどこに骨があるのかを教えてください」という言葉を複数の人から聞いた。インドネシア時代が終わり、東ティモールが国として独立しても、紛争は終わっていないのである。

おわりにかえて

これまで述べてきたように、映画『ベアトリスの戦争』はインドネシアの軍事占領下における暴力の被害だけではなく、インドネシア時代を東ティモールの女がいかにか生きてきたのかを描いた作品である。女が経験した苦難に光を当てているが、その際女がおかれた状況とその中で意思をもって生きようとする姿を描いている。

最後に、『ベアトリスの戦争』が作られ、上映されることの意義を2つ述べたい。一つは、作品を観ることが東ティモールの歴史を知る機会となっていることである。共同監督のベティ氏は、小さい頃おじいさんが話してくれた民話から世界をみたことに触れ、同じように映画から世界をみることができると述べている。また、東ティモールの映画をつくることで「東ティモールの物語」を人々に知ってもらえるとも語っている。独立の是非を問う住民投票から20年が経つ今日においては、東ティモールの人であってもインドネシア時代を知らない世代の人々が増えてきている。そのような現況においては、東ティモールの若い世代に歴史を語り継ぐ役割を、過去について物語る『ベアトリスの戦争』は担っているといえる。

もう一つは、インドネシア時代に苦難を経験した人々に作品が寄り添える可能性である。もしも経験した苦難によって心に傷を負ったならば、その癒しには、その人自身が自らの傷に向き合い、表出させる過程が必要である。だがそれだけではなく、ある人の経験に社会がどのように向き合い、受けとめるか、つまり社会のまなざしも影響をもつ。そのように考えたとき、人々の経験や出来事をどのようにみるかという作品がもつまなざし次第では、映画は傷ついた人々に寄り添うことができる。『ベアトリスの戦争』では、統合派東ティモール人民兵の子どもを産んだベアトリ

スが、初めのうちはその子どもを受け入れられずにいるが、最後にはその子どもとともに生きていく決心をする。ラストシーンではベアトリスの葛藤と勇気が静かな映像で語られる。

参考文献

日本語文献

亀山恵理子 2019 「東ティモールの映画を世界の映画地図の中へ——ベティ・レイス監督インタビュー」『季刊東ティモール』第74号(大阪東ティモール協会発行)、18-21頁。

ベティ・レイス「東ティモールの映画産業について」http://www.shortshorts.org/southeast_asia/column-timor-leste/(国際短編映画祭「ショートショートフィルムフェスティバル&アジア」と国際交流基金アジアセンターによる東南アジアの短編映画上映とシンポジウムに関するウェブサイト〈最終閲覧日:2015年10月20日〉)。

英語文献

Commission for Reception, Truth, and Reconciliation in Timor-Leste (CAVR). 2013. *Chega! The Final Report of the Timor-Leste Commission for Reception, Truth, and Reconciliation*, Jakarta: KPG in cooperation with STP-CAVR.

Faludi, Laula, Nela Pereira, Alex Scrivner, Galuh Wandita. 2017. *Timor-Leste's Children of War: A Promise to Heal: Policy Paper*, Assosiasaun Chega Ba Ita (ACbit).